舞踊教育の問題点

近藤英男

本題については，すでに1977年・女子体育において「今後の舞踊教育に望む」として8項目を設定して論じたが，ここではあらためて問題点として若干の考察を加えたいとおもう。[1]

1．学校教育における舞踊教育の位置づけ

本来芸術の範疇に属する舞踊を体育との連関でどうした位置づけを与えるかについては諸外国において種々の考え方があり，我国においてもしばしば体育学会での論争のテーマとされてきたことは周知の通りである。

これについて私は，従来の体育の概念に対して新しく身体文化，舞踊（ダンス）に対する運動芸術の立場こそ新しい教育舞踊観の思想的基盤たることを提言してきたのであるが，この問題は未解決のまゝ流されている感がある。

Körper Kultur は，トゥルネン（Turnen）とタンツ（Tanz）を包括統合せんとした新概念としてドイツで生れた言語であるが，私もこの身体文化論の立場を根底にし，さらに身体活動を一連の美的創造的活動（行動美学としての体育）としてとらえ，身体美の創造（体操）→ 技術美の創造（スポーツ）→ 芸術美の創造（舞踊）として，従来の体育の概念を破って，その根源性ともいうべき身体性・身体活動に着目し，身体文化としてより総合的な新しい体育概念を提唱しつづけてきたのである。[2]

2．舞踊教育の目標・内容について

学習指導要項では，おどる，つくる，みるに即して理論的な展開がなされていることは是としても，従来の学校舞踊はつくる以前の原体験としてのおどることの重要性が打出されていなかったことが指摘されよう。

「楽しい舞踊学習」が提唱されていることは当然のことであるが，スポーツをも含めて，舞踊などの身体文化が，人間の存在に如何なる役割りをもち，文化的意義を有するかの検討が舞踊教育の目標設定のバックグランドとしてなさるべきであり，そうしたものの一つとして舞踊のもつ祭典性の強調――われわれの生活秩序を構成している文化的要素として民族学でいうハレ（芸能・超現実・酩酊・狂気などの系譜）とケ（労働・現実・正気・素面などの系譜）の重要性を指摘したい。

山城は『古代人はハレとケという二つの対照的な二つの空間を，時分割方式で空間移動する，つまり日常生活の中である時間・空間を定めてそこに異次元空間を現出させるというハレとケによる環境制御方式によって安定した生態系の維持を図ってきたと考えられる』というように，スポーツや舞踊は，ハレの系譜として，人間存在や文化の促進に大きな役割りを果すものと考えられるのである。[3]

氏は更に進めて，人間の住む環境として，従来の物質・エネルギーの二本柱に新しく情報を加え，人間にとって本来ふさわしい情報環境の回復を目指し，〈祭りの再創造〉によって人間やコミュニティテイの復活・及び人間的な地域文化の創造を目指されているが，これらは，文化生態学・情報環境学という新しい学問的立場からのユニークなスポーツ観，芸術観への提言として注目されるのである。

こうした立場からいえば，従来欧米のモダン・ダンス・フォークダンスに偏していた我国の学校舞踊の内容として，我が国独自の民族舞踊（民踊・日本舞踊・能楽など）が大きくクローズアップされるべきであり，この領域の開発こそ第二の舞踊革命ともいうべきともおもわれるのである。

欧米のものまねでなく，「日本人の根本にある感情をゆりうごかすもの」，「体の芯からズーンとひびく感動」と評されているように，すでに山城氏は，従来のヴェルカント唱法にかわる日本式発声を基盤としてユニークな民族音楽の近代化の実験を試みていられることは，音楽教育界にも大きな示唆を与えると共に我が国の舞踊教育のあり方についても再検討をせまるものといえよう。

3．舞踊文化と舞踊教育

今秋日本体育学会シンポジウムで，「国民スポーツとダンス」が取上げられたことは，舞踊教育が第二の転換期・発展期にあることを物語るものといえよう。

従来の舞踊教育が，いわば「学校内舞踊」と評されるように主として体育か芸術かの問題をはらみつつその目標・内容・指導法の研究・実践が行なわれてきたのに対し，生涯教育・生涯体育の観点からいわば〝Dance for all〞〝Life Dance〞として新たな照光を浴びたわけで，こうした次元においていま一度，舞踊教育の独自性・身体文化のなかでの体育やスポーツとのかゝわり方，目標・内容（特に学習指導要領における），指導者，教員養成機関における舞踊プログラム，研究機関・社会的な組織体制が吟味さるべきとおもわれるのである。

舞踊指導者の教育体制については，残念ながら我が国には舞踊家養成のための芸術大学や舞踊学部は存しない。ドイツの芸術大学には勿論舞踊学科があり，イギリスでもラバン・センターが設置され，一

般的な舞踊研究と学校舞踊教師の水準向上に大きく寄与している。すでに武道学科の設立をみている今日，舞踊学部あるいは芸術大における舞踊科の新設こそ急務とおもわれる。

舞踊学会の発足は，学際的な研究機関としてユニークな研究が注目されているが，日本体育学会における舞踊分科会の創設も重要な課題とおもわれる。

教員養成大学における舞踊に関するカリキュラムは，体育の座にあって，しかも教員免許資格ともからんで必ずしも充実したものでなく，この解決も今後の課題といえよう。

更に重要なことは，スポーツにおいては，一応日本体育協会・日本レクリエーション協会などの組織によって社会生活におけるスポーツの振興がすゝめられているが，舞踊文化振興についての組織については殆んど無策に近いといえよう。

フォークダンス協会や芸術舞踊協会に存するが，舞踊文化全般についての全国的統一的な組織はみられない。イギリスではリズム・ダンス協会として，音楽体操やジャズギムナスティックなどの体操系統のものとフォークダンスや創作ダンスなどのダンス系統を統合した形で行なわれているのは刮用さるべきで，生涯スポーツに対する生涯ダンス・みんなのスポーツに対するみんなのダンスを目指して，学校と社会を一貫・連続する組織体制の確立こそ舞踊教育促進の大きな要めとおもわれるのであり，体操系・フォークダンス系・創作ダンス・バレー・民踊・日本舞踊・古典芸能としての舞楽や能楽などを統合する舞踊文化発展のための機関の設立がのぞまれるのである。

舞踊教育は，新しい照光のなかからその独自性をうき出し，存在価値を主張すべきであるとおもわれる。

註 1．近藤英男「今後の舞踊教育に望む」女子体育，1977・2月号
2．近藤英男「体育新論」タイムス，1975
3．山城祥二「今､なぜ祭りなのか」地球 220号，1980，芸能山城組，地球出版局